

アイヌ墓の副葬品

関根 達人

1. はじめに

近年、日本列島に展開した文化の多様性が明らかになるにつれ、北はサハリン・北海道・クリル諸島から東北地方の北端部にいたる地域に居住していたアイヌ民族の歴史に対する関心が高まりを見せている。蝦夷錦や青玉といった山丹交易品、あるいは本州の和人から入手した各種漆器類や金属製品など宝物（イコロ）に代表される工芸品は、彼らの交易活動の活発さとともに、その豊かな物質文化の一端を垣間見せてくれる。

本稿で取り上げるアイヌ墓の研究は、アイヌ民族に関する形質人類学的関心に基づく初期の研究に始まり、日本考古学でも長い歴史を有する分野のひとつである。にもかかわらず、初期のアイヌ墓の発掘事例の多くが、しばしば「骨探しを目的とした墓あばき」と批判されるように、正しい考古学的手法を欠いたものであり、後年、アイヌの墓制研究を阻害する原因ともなったことは、誠に遺憾なことである。

1970年代末頃からは、道内各地の開発工事に伴う緊急発掘調査で、アイヌ墓の検出が相次ぎ、考古学上の基礎的データが蓄積されるようになった。そのなかで千歳川流域の発掘調査事例に基づき、近世アイヌ墓の墓壇形態・頭位方向・副葬品の検討を行った田村俊之氏の報告（田村1983）は、初めて本格的に考古学的手法を用いて近世アイヌの葬制に取り組んだ研究として高く評価される。また、平川善祥氏は、道内で発掘された近世・近代のアイヌ墓を集成し、アイヌ墓に関する考古学的知見をとりまとめた（平川1984）。

筆者は、これまで東北地方において発掘調査された近世墓約1300基のデータをもとに、副葬品の分析を行い、食膳具にみられる地域差や喫煙率、近世鏡の変遷などを検討したり、墓の構造や副葬品の推移から近世大名の質的变化について論じた（関根1999, 2000, 2002）。それらの分析を通して、近世墓の副葬品が、近世社会の経済システムや社会構造、習俗等の問題を解明する上で、極めて有効な歴史資料であることが確かめられた。

北海道のアイヌ墓は一般に豊富な副葬品を有することで知られており、副葬品の種類や構成の分析から、アイヌ社会の構造や風俗、交易の在り方等を論じるための有益な情報が得られる可能性が大きい。平川氏の集成から約20年が経過し、その後新たに蓄積された資料も多い。また、アイヌの葬制に関しては、古老からの聞き取り調査によるデータの蓄積もあるが、考古資料との本格的な比較検討は未だ行われていない。

本論では、はじめにアイヌ墓の副葬品に関して考古学的事実を明らかにし、その歴史的意味合いを考察する。次いで民族誌との比較を試み、考古資料と民族誌との異同とその原因を論じる。なお、本稿は、2003年5月25日、日本大学で行われた日本考古学協会第69回総会において研究発表した分析（関根2003b）に基づくものである。

2. 研究の方法

①中近世アイヌ墓の抽出方法

中近世アイヌ墓の抽出には、墓の時期の特定と、被葬者が「アイヌ」か「和人」かの判定という2つの問題が係わってくる。以前筆者が東北地方の近世墓を扱った際には、専ら墓碑に刻まれた年号や副葬された六道銭の種類や構成に基づき、墓の年代を特定した。しかしアイヌ墓の場合、葬制の違いから、年号を刻んだ墓碑や六道銭の副葬は期待できない。反面、北海道には、墓の年代の指標となる火山灰が多数存在する。

和人墓かアイヌ墓かという問題に関しては、これまでの考古学的、民族学的研究の蓄積から、アイヌの伝統的葬法は伸展葬であり、一般に豊富な副葬品を伴うことが指摘されている（田村1983, 平川1984, 宇田川2001など）。同時期の和人が、火葬されるか、土葬の場合にも座位ないし屈位であるのと対照的である（註1）。

本論では、アイヌ墓を抽出する際に、その指標として伸展葬を重視した。近年の調査事例からみて、アイヌ墓における伸展葬自体は15世紀にまで遡り、その時期には既にアイヌの葬制が成立して

いた可能性が高いと思われる。なお伸展葬墓でも副葬品等から判断して、埋葬年代が明治以降に下る墓については別に近代墓として扱っており、ここでいう中近世アイヌ墓の年代はおよそ15世紀～19世紀後葉ということになる。

以上の基準に従い、2001年3月末までに北海道内で調査報告された中近世アイヌ墓を抽出したうえで、そのなかから墓壙と副葬品の対応関係が明確な65遺跡（図1）、計235基の墓（表1～3）に関して、副葬品の分析を行った。

②時間軸の設定と検討項目

漆器や刀といったアイヌ墓の主要な副葬品の編年が確立されていないこと、アイヌの漆器や刀はいわゆる「宝物（イコロ）」として長期間伝世した可能性が充分考えられること等から、本論ではあえてこれらの副葬品による年代決定を控えた。前に述べたように、近世アイヌ墓の場合、墓碑や六道銭に代わって、火山灰が年代の指標として有

効である。特に近世アイヌ墓の調査例の多い石狩低地帯や日高地方沙流川流域では、支笏湖の南に位置する樽前山を噴出源とする樽前b火山灰（Ta-b:1667年）と樽前a火山灰（Ta-a:1739年）の2枚の火山灰層が存在する。特に樽前b火山灰は、降下年代が北方史上の重大事件である寛文9年（1669）の蝦夷蜂起（ジャクシャインの戦い）に近いことから、事件がアイヌ社会に与えた影響を考古学的に検討する際、極めて重要な指標となる。本論では、Ta-a、Ta-bこの2つの火山灰の降下年代を基準とし、これらの火山灰との関係がつかめない墓については、他の降下火山灰、編年の確定している陶磁器や初鋳年の判明する銭から、Ta-a、Ta-bとの前後関係が推定可能なものについてのみ、時間的変化を検討する場合の対象に加えた。なお、時間的変化については、近世から近代への変化を読みとるため、19世紀末～20世紀中葉のアイヌ墓がまとまった数調査報告されている紋別市旧元紋別墓地（73基）、浦河町旧姉茶墓地

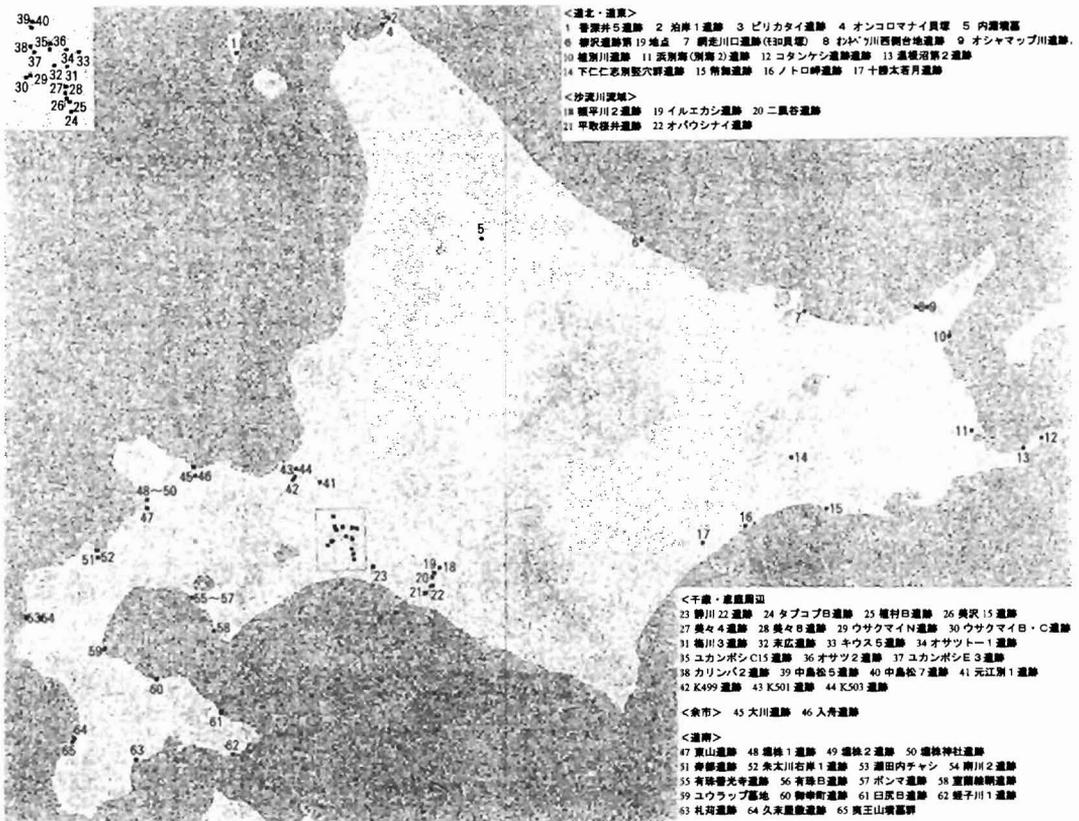


図1 中近世アイヌ墓が発掘調査された遺跡

アイヌ墓の副葬品（関根）

装身具				その他	副葬品の詳細	備考	文献
耳飾	垂飾	硝子玉	鍍金				
							内山ほか1999 内山ほか1999 内山ほか1999 内山ほか1999
					繻み物1	襦1 襦1	襦は南部箔襦 2号墓の下で検出
1		4			礼帽(鉢巻) 頸飾	17c肥前磁器小皿1 赤漆塗角盆1	内山2000 内山2000
1						鹿首1	佐藤1964
2						襦1	大場・大井1973 大場・大井1973
		60				襦1 吊耳三足鉄鍋1	大場・大井1973
							墓墳上層に焼土層(焼火?) 河野・佐藤1963
							墓墳上層に焼土層(焼火?) 河野・佐藤1963
							墓墳上層に焼土層(焼火?) 河野・佐藤1963
						襦1	河野・佐藤1963 河野・佐藤1963
							墓墳上層に焼土層(焼火?) 松下・三浦ほか1975
1				1		寛永通寶1 腰刀1	米村1950 松田1993
						太刀1 小柄1	松田1993
1							1739年以前 松田1993
						漆襦1 不明漆器1 吊耳鉄鍋1	2体合葬 松田1993
						吊耳鉄鍋1	松田1993
						吊耳鉄鍋1	松田1993
						杯1	松田1995
2						太刀1 腰刀1	耳飾りの下から盤状の繻み物(「キナ」) 豊原・湧坂1981
2						漆襦1 内耳鉄鍋1	藤田ほか1971
2	409			16			開元通寶2 北宋銭10 明銭4 川上1994
2							安政3年降下火山灰の下(1856年以前) 1886年以前 児玉・大場1956 児玉・大場1956 児玉・大場1956
						越後産焼酎徳利1	Mea1(越阿寒岳第1火山灰)の上(1765年以降) 富永・三浦ほか1965
							石川1994
						吊耳三足鉄鍋1	石川1994
2	49		54	竹製管玉8 籠1 不明鉄製品5	唐銭2 北宋銭31 金銭1 明銭20	内耳鉄鍋1	石川1994 石川1994 石川1994 石川1994
						襦1	山本1984
						襦1	山本1984
							山本1984
						襦1	Ta-bの上(1867年以降)のMe-aを切る 石襦ほか1975
						小札1 刀柄1 鍍金具1	Ta-bの下(1867年以前) 川内ほか1990
						襦先1	Ta-bの下(1867年以前) 墓標穴あり 鍋と飯は墓墳外 豊原・藤中1989
						種1	Ta-bの下(1867年以前) 襦は南部箔襦 田中ほか1986
						中柄は矢柄?	Ta-bの下(1867年以前) 田中ほか1986
						襦1	Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1999
						襦2	Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1999
							Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1999
						釘3 鏢2	Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
						釘1	Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
							Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
							Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
						釘15	Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
							Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
							Ta-bの上(1867年以降) 森岡・長田1997
						襦1 襦1 内耳鉄鍋1	大場1963
						襦1 襦1 墓括通寶1 洪武通寶1	多田1967
							Ta-cの上 佐藤ほか1995
1							Ta-bの下(1867年以前) 熊谷・藤井1988
						内耳三足鉄鍋1	Ta-bの下(1867年以前) 墓標穴あり 千葉ほか1984
							Ta-aの下(1739年以前) 石附1977
						襦1	Ta-aの下(1739年以前) 石附1977
						襦1 内耳三足鉄鍋1	Ta-aの下(1739年以前) 種市ほか2001
							工事中発見 太刀は現存せず銅のみ 中田・石附1974
						火口入れ1	中田・石附1974
						鉢1	Ta-aの下(1739年以前) 釣針は袋に入った状態で出土 中田・石附1974
						襦1	Ta-aの下(1739年以前) 西蓮寺ほか1979
						襦1 刃青製矢柄17	Ta-aの下(1739年以前) 西蓮寺ほか1979
						刃青製矢柄13	Ta-aの下(1739年以前) 西蓮寺ほか1979
						襦1 襦1	Ta-aの上(1739年以降) 西蓮寺ほか1979
						襦2	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1986
						襦2	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1986
						襦1 小札3	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1986
						盆1 襦2	Ta-aの下(1739年以前) 吊耳三足鉄鍋1 大谷・田村1982
1	272					襦1 皿1 天目台1	Ta-aの下(1739年以前) 吊耳三足鉄鍋1 大谷・田村1982
						襦5 皿1	Ta-aの下(1739年以前) 吊耳三足鉄鍋1 大谷・田村1982
2						襦1 襦1	Ta-aの下(1739年以前) 青製中柄と青製合計36 大谷・田村1982
						盆1 襦1	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1982
							Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1982
						鍍製品2	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1982
						日本刀 佳甲	Ta-aの下(1739年以前) 大谷・田村1982

表2 発掘調査された中近世アイヌ墓とその副葬品(2)

遺跡名・墓墳名	所在地	被葬者		副葬品																					
		性	年齢	武器具	狩猟具	工 具	漁労具	食器等	喫煙具	その他	備考														
				太刀腰刀	刀	小刀	矢鏃	鹿・中柄	刀子	山刀	手斧	鉈	針	針	鉤	鉤	ヤス	針	中柄	漆器	漆器	キセル	火打石	火打金	煙草入
末広遺跡IP-52	千歳市中央	?	成人	1					1																
末広遺跡IP-53	千歳市中央	?	青年	1				24	1																
末広遺跡IP-54	千歳市中央	?	?	1				27	1						3		1		1						
末広遺跡IP-58	千歳市中央	?	思春期						1	1						1									
末広遺跡IP-59	千歳市中央	?	?																						
末広遺跡IP-60	千歳市中央	?	成人	1	2			8	1													1			
末広遺跡IP-61	千歳市中央	?	?																						
末広遺跡IP-64	千歳市中央	?	?						2	1															
末広遺跡IP-74	千歳市中央	?	成人			1				1															
末広遺跡IP-81	千歳市中央	?	若年																						
末広遺跡IP-84	千歳市中央	?	成人		2				1	1															
末広遺跡IP-91	千歳市中央	?	?																					1	
末広遺跡IP-111	千歳市中央	?	成人						2			1										4			
末広遺跡IP-112	千歳市中央	?	若年							1													1		
末広遺跡IP-114	千歳市中央	?	成人	1				4	2	1												2	1		
末広遺跡IP-122	千歳市中央	?	?						1																
末広遺跡IP-124	千歳市中央	?	成人						1		1	1											2		
末広遺跡IP-125	千歳市中央	?	若~青年						1														2	1	
末広遺跡(鏡)IP-119	千歳市中央	?	初児																				1		
末広遺跡(鏡)IP-125	千歳市中央	?	壮年						1	1														1	2
末広遺跡(鏡)IP-140	千歳市中央	?	壮年						2		1	2													
キウス5遺跡UP-138	千歳市中央	?	男 壮年	1																					
オサツトー1遺跡P-1	千歳市中央	?	?							1	1												1		
オサツトー1遺跡P-2	千歳市中央	?	?							1	1													1	
ユカホツC15遺跡AP-1	千歳市長都	?	?		1			4	1	1	1	1											1		
ユカホツC15遺跡AP-2	千歳市長都	?	?																						
オサツ2遺跡GP-A	千歳市長都	?	?																				1		
オサツ2遺跡GP-B	千歳市長都	?	?																						
ユカホツE3遺跡B第100号土壇	恵庭市戸磯453	?	?		3				2						1										
カリンバ2遺跡第IV地点AP-1	恵庭市黄金95	?	?		1				2																
カリンバ2遺跡第IV地点AP-2	恵庭市黄金95	?	?		2				2													1			
カリンバ2遺跡第VI地点AP-3	恵庭市黄金95	?	?		1				1																
カリンバ2遺跡第VI地点AP-4	恵庭市黄金95	?	?																						
カリンバ2遺跡第VI地点AP-5	恵庭市黄金95	?	?		1				1				2									3	5	1	
中島松5遺跡近世墓	恵庭市中島松	?	若年	1					3				1										1	1	
中島松7遺跡AP-1	恵庭市中島松	?	男 壮年						1		1	1												1	
中島松7遺跡AP-2	恵庭市中島松	?	?																						
中島松7遺跡AP-3	恵庭市中島松	?	?						1																
元江別1遺跡近世イヌ墓	江別市元江別	?	?		1																			1	
K499遺跡第1号ピット	札幌市北区福路1条10丁目	?	?		1				1																
K499遺跡第2号ピット	札幌市北区福路1条10丁目	?	?		1				1																
K501遺跡第一号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?																						
K501遺跡第二号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?																						
K501遺跡第三号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?						2	1														1	
K501遺跡第四号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?																					2	
K501遺跡第五号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?						1															5	1
K501遺跡第六号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?						1		1													3	1
K503遺跡第一号土壇	札幌市北区福路町上福路	?	?		1				3															1	
大川遺跡GP-1	余市町大川町	?	男 成人	1		1			1														3	1	2
大川遺跡GP-3	余市町大川町	?	男 成人						1															1	3
大川遺跡GP-4	余市町大川町	?	成人						1																
大川遺跡GP-6	余市町大川町	?	成人			1																			
大川遺跡GP-9	余市町大川町	?	?			1																		1	
大川遺跡GP-16	余市町大川町	?	?																					1	
大川遺跡GP-18	余市町大川町	?	?																						
大川遺跡GP-45	余市町大川町	?	女 若年						3								1						1	1	
大川遺跡GP-46	余市町大川町	?	男 成人			1			1															1	1
大川遺跡GP-106	余市町大川町	?	?																						
大川遺跡GP-136	余市町大川町	?	成人						1																
大川遺跡GP-346	余市町大川町	?	12~14歳						1																
大川遺跡GP-379	余市町大川町	?	?						1																
大川遺跡GP-453	余市町大川町	?	女 成人			1			2	1	1													1	
大川遺跡GP-496	余市町大川町	?	?			1																			
大川遺跡GP-582	余市町大川町	?	?						1														1		
大川遺跡GP-596	余市町大川町	?	?						1		1	1													
大川遺跡GP-800	余市町大川町	?	?						1																
大川遺跡GP-808	余市町大川町	?	男 成人						1																
大川遺跡GP-813	余市町大川町	?	?						1				1												
大川遺跡GP-843	余市町大川町	?	?																						
大川遺跡GP-850	余市町大川町	?	成人						2																
大川遺跡GP-851	余市町大川町	?	?																						
大川遺跡(1999)P1	余市町大川町	?	?			1		1	1														1	1	
大川遺跡(1999)P2	余市町大川町	?	?																				2		
大川遺跡(1999)P3	余市町大川町	?	?			1			1																
大川遺跡(1999)P5	余市町大川町	?	?																						
大川遺跡(1999)P6	余市町大川町	?	?			1			1														1		
大川遺跡(1999)P8	余市町大川町	?	?						1															1	1
大川遺跡(1999)P10	余市町大川町	?	?			1																		1	
大川遺跡(1999)P12	余市町大川町	?	?			1																		3	

アイヌ墓の副葬品（関根）

装身具				副葬品の詳細	備考	文献
耳飾	垂飾	硝子玉	その他			
					Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
		1	釘1 銅製飾1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
					Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1982
					Te-aの上(1739年以降)	大谷・田村1981
				碗1 小札2	飾は青銅17シマサウ盤7 Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
					Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
		1	祥符元宝1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
		1	太平通宝1 銅1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1982
					Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
				吊耳三足鉄鍋1	Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1981
2		4	盆1 碗3		Te-aの下(1739年以前) 内朱外黒碗	大谷・田村1982
			碗1		Te-aの下(1739年以前) 内朱外黒碗	大谷・田村1982
			盆1 碗1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1982
		1	元祐通宝1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1982
			碗2		Te-aの下(1739年以前) 内黒外朱碗	大谷・田村1982
			吊耳三足鉄鍋1		Te-aの下(1739年以前)	大谷・田村1982
			碗1		Te-aの下(1739年以前)	田村1985
					Te-aの上(1739年以降)	田村1985
			硫黄12		Te-aの下(1739年以前)	田村1985
					Te-aの直下(1739年以前)	菅川ほか1997
			棒状鉄製品1			千葉ほか1984
			棒状鉄製品2	内耳鉄鍋1(一文字溝口)	斧と鉄鍋は墓墳外	千葉ほか1984
2				内耳鉄鍋1	Te-aの下(1739年以前)	西田・三浦・鈴木1999
			鏝2	碗1	Te-aの下(1739年以前)	西田・三浦・鈴木1999
			鏝2		Te-aの下(1739年以前)	三浦・嶋田・鈴木1995
					Te-aの下(1739年以前)	三浦・嶋田・鈴木1995
					Te-aの下(1739年以前)	上屋・佐藤1992
					Te-aの下(1739年以前)	上屋ほか1998
					Te-aの下(1739年以前)	上屋ほか1998
					Te-aの下(1739年以前)	上屋ほか2000
					Te-aの下(1739年以前)	上屋ほか2000
4		270	碗4 膳1 白磁小皿3		Te-aの下(1739年以前) 白磁は16世紀	上屋ほか2000
			碗1		Te-aの下(1739年以前)	松谷1989
					Te-aの下(1739年以前)	上屋1988
					Te-aの下(1739年以前)	上屋1988
					Te-aの下(1739年以前)	上屋1988
			鐏先1	碗(内外未見込黒で網紋)1	Te-aの下(1739年以前)	關部真幸ほか1981
						出穂・羽實1999
						出穂・羽實1999
			鏝1		Te-aの下(1739年以前)	出穂1999
			板状鉄製品1	碗1	Te-aの下(1739年以前)	出穂1999
				碗1 盆1	Te-aの下(1739年以前)	出穂1999
				碗1	Te-aの下(1739年以前)	出穂1999
				碗1	Te-aの下(1739年以前)	出穂1999
			金糸	膳1 碗2		出穂1999
				碗1		乾2000a
			コイル状鉄製品	百貫1		乾2000c
		55				なし 筆者実見
						なし 筆者実見
						乾2000c
						漆器器種不明朱色
						なし 筆者実見
						なし 筆者実見
		2				乾2000c
			不明鉄製品1			なし 筆者実見
		1			青玉	なし 筆者実見
						乾2000a
						乾2000a
						乾2000a
		2	笹輪徳利1		青玉	なし 筆者実見
						乾2000a
2	252	45			唐1北宋37明7	乾2000a
	420	27	サメ歯15 総金具2		唐1北宋24明2	乾2000a
						乾2000a
					大半が攪乱されている	なし 筆者実見
					GP-851より古	乾2000b
2					GP-850より新	乾2000b
			舟釘1	碗1		安西・岡崎・乾2001
				碗2		安西・岡崎・乾2001
				鐏1		碗の1点は漆絵
		1				錢種不明
						青玉
				碗1		安西・岡崎・乾2001
						安西・岡崎・乾2001
				碗1		安西・岡崎・乾2001
						安西・岡崎・乾2001
				碗1		漆碗は漆絵
		1		盆1 碗2		新寛永1(1700年以降) 小札1
						安西・岡崎・乾2001

(29基)、えりも町新浜遺跡(12基)の3遺跡114基のデータもあわせて、主要5品目の副葬率を比較検討した。

地域性は、調査件数を考慮し、道北・道東(17遺跡39基)、沙流川流域(5遺跡計13基)、千歳・恵庭周辺(17遺跡計64基)、余市(大川と入舟の2遺跡計49基)、道南(19遺跡59基)の5地域に分け、主要5品目の副葬率を比較検討した。

被葬者の性と副葬品との関連性は、各報告書の形質人類学的検討結果をもとに、主要10品目に關して追求した。235基の近世アイヌ墓のうち、人骨から被葬者の性別が判明している墓は102基(約43.4%)で、その内訳は男性墓44基、女性墓58基であった。

3. 分析結果

中近世アイヌ墓における最も普遍的な副葬品は刀子であり、約63%の墓に納められていた。次いで多いのが漆器(53%)で、太刀・腰刀(37%)、煙管(20%)、鉄鍋(14%)、山刀(13%)、首飾・玉類(13%)、耳飾(11%)が続く(図2)。他には、矢(鏃・中柄)、矢筒などの狩猟具、鉤鉾、鉾、釣り針などの漁撈具、鉞、鎌、針、針入といった工具類、鏢や小柄をはじめとする刀装具、鎧の小札などが少数みられる。本州の中近世墓において、六道銭として最も普遍的な副葬品である銭の副葬率は、中近世アイヌ墓では僅か0.4%に過ぎず、首飾(タマサイ)の部品として用いられていた可能性が高いものばかりである。

【時代的变化】(図3・4)

年代の指標を、1667年、1739年のどちらに求めるにせよ、全体としてみれば、時代が下るに従ってアイヌ墓の副葬品が貧弱になることが明白となった。特に刀子、太刀・腰刀や漆器の副葬率の低下は顕著で、なかでも太刀・腰刀は近代のアイヌ墓へはほとんど副葬されることがない。煙管は、18世紀代に増加し、近代に入ると減少する。一方、鉄鍋の副葬率には目立った変化がなく、常にある程度墓に納められ続けていたようである。

【地域性】(図5)

先に設定した5地域を、主要5品目の副葬率のパターンにより、道北・道東、沙流川流域と余市周辺、千歳・恵庭周辺と道南の3グループにまとめることができそうである。地域性に大きく係わ

ると予想される副葬品は、鉄鍋と煙管であり、沙流川流域や余市周辺では、他の地域に比べ煙管の副葬率が高く、逆に鉄鍋がほとんど副葬されない(註2)。

【性差】(図2)

女性墓にのみ副葬される品としては鉄鍋がある。反対に太刀・腰刀は男性墓への副葬率が高いが、女性墓に全くみられないわけではない。女性墓では鎌や鉞の副葬される比率が男性墓に比べ高いが、同じ刃物という意味で、それらの鎌や鉞が太刀・腰刀の代わりをしていたとも考えられる。

刀子、漆器、煙管、首飾・玉類、山刀に関しては特に男女間の副葬率に顕著な差異は認められず、共通した副葬品であった可能性が高い。

4. 考察

①主要な副葬品とその意味

【小刀(マキリ)】

前述の通りアイヌ墓に最も普遍的な副葬品は、マキリとよばれる小刀である。刃部の長さは10cm前後のものが多い。副葬率は男女間で特に差はなく、全体の6割を超す墓から出土している。10歳未満の小児を除くと副葬率は7割近くにも達することから、ほとんどの成人が必携していた可能性が高い。1基当たりの出土数は1点のものがほとんどであるが、2~4点出土する例も散見され、樽前b火山灰の下位に位置づけられる平取町額平川2遺跡6号土坑では14点ものマキリが副葬されていた。

マキリの副葬率は、近代に入ると急速に低下する。マキリは炊事から木材の加工まで何にでも使える道具であるが(萱野1978)、特にクマ・シカ・アザラシなどの毛皮や干鮭などの生産には不可欠とされる(佐々木2001)。マキリの副葬率が急速に下がる背景には、伝統的な生業の解体という近代のアイヌが辿った歴史的経緯があろう。

【漆器】

マキリに次いで副葬率が高いのが漆器である。アイヌが漆器を好むことは良く知られているが、実際、半数以上の墓から漆器が発見されている。東北地方の近世墓からも比較的多くの漆器が出土しているが、それでも副葬率は1割弱に過ぎず、アイヌ墓の比ではない(関根1999)。また東北地方の近世墓にはアイヌ墓と異なり、碗を主とする

アイヌ墓の副葬品（関根）

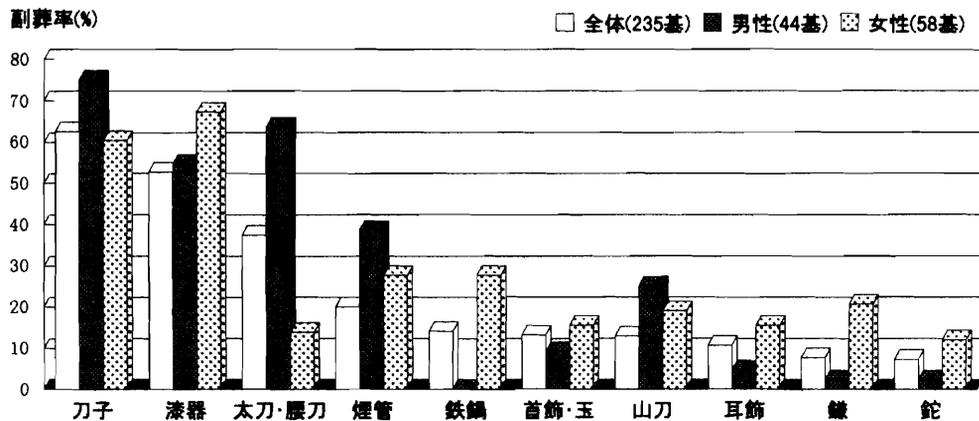


図2 中近世アイヌ墓の副葬品（上位10品目）

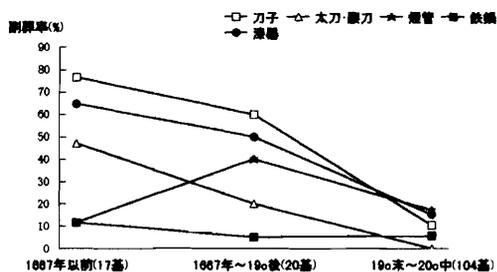


図3 副葬率の変遷1（上位5品目）

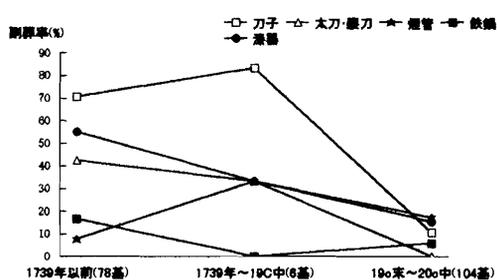


図4 副葬率の変遷2（上位5品目）

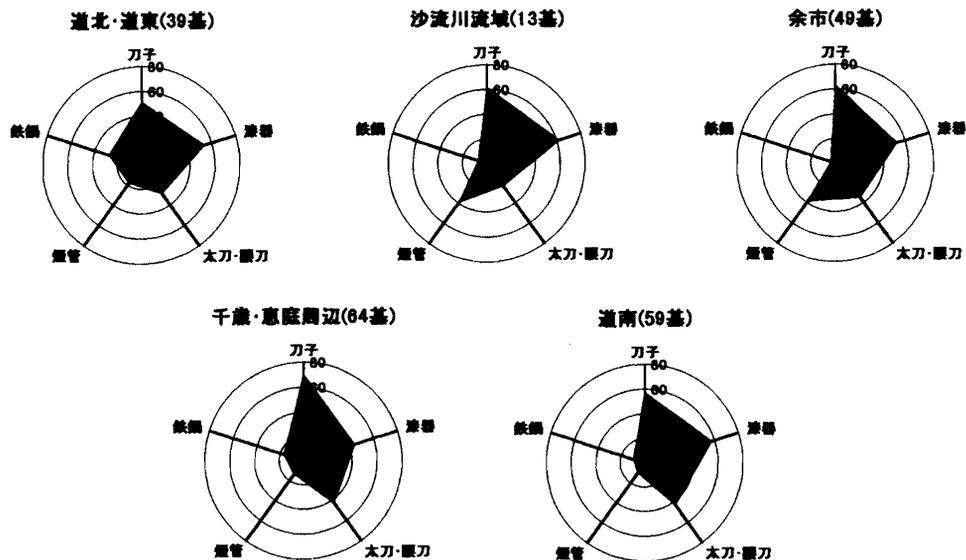


図5 中近世アイヌ墓の副葬品にみられる地域性

陶磁器がしばしば認められるが、副葬率は漆器よりも低い（関根前掲）。アイヌの漆器は、単に日用飲食器に止まらず、酒造りとそれに伴う儀礼の為の宝物という側面が強調されることが多い。副葬された漆器のうち形状の判明するものは、出土点数の多いものから順に、椀・杯類（107点）、膳・盆・御敷類（30点）、高杯、皿、行器（以上各2点）、天目台、鉢、蓋（以上各1点）となる。

数は少ないものの、酒を用いた儀礼の際に使われるタカイサラに相当する天目台や高杯、宝物として大切にされていた可能性の高い行器（シントコ）が含まれている点が注目される。アイヌ語でオッチケと呼ばれる膳・盆・御敷類は、酒を用いた儀式の際、イクパスイをのせたトゥキとタカイサラや供物を並べるのに使われる。アイヌ墓から出土する膳・盆・御敷類は、ほとんどの場合、椀や杯を伴っている。それらは本州の近世墓に見られる日常飲食器としての漆器や陶磁器と異なり、極めて儀礼的な意味合いが強いと考えられる。

近年アイヌの漆器に関しては、考古資料を踏まえ活発な研究が行われるようになった（北海道開拓記念館1998、北野2002a・b、田口2002、乾2002、田村・小野2002、古原2002）。漆器の自然科学的分析を手がける北野信彦氏によれば、余市町大川遺跡、同入舟遺跡、礼文島香深井遺跡など日本海沿岸地域（「海の民としての近世アイヌ社会」）のアイヌ墓から出土する蒔絵漆器には高度な技術を用いた優品資料が多く、地塗りも多層塗りが比較的多く見いだされるという（北野2002a）。そうした優れた漆器は、まさにアイヌが宝物（イコロ）として大切に扱っていたものであり、それらの一部が副葬されたと考えて良いであろう。

【刀】

マキリ・漆器に次ぐ副葬率を示すのが太刀・腰刀などの刀（エムシ）である。副葬率は男性墓では6割を越し、女性墓でも1割強、全体では4割弱の墓に副葬されていた。刀剣類の副葬率としては、古今東西を問わず、極めて高い数値といえ大変注目される。アイヌの刀、すなわちエムシは美しい装飾を有するものが多く、一般には刀身よりも拵を重視した宗教儀礼用の装飾品と解されている。確かに伝世したエムシの刀身は、刀の形をした木や真鍮刀、あるいは鉄製ではあるが鈍い鍔刀がほとんどであるが、だからといってその武器と

しての側面を全く否定してしまってもよいものだろうか。アイヌの刀を「切れない刀」とする見解は、主として伝世品や聞き取り調査から導き出されたものである。アイヌ墓から出土した太刀・腰刀の詳細な検討は現在行っている最中だが、今回太刀・腰刀としたものの大部分は、焼入れの有無などは確認できないものの、鉄製の刀身を有しており、その点で伝世したエムシとはやや異なっている。また、それらの多くは切先・茎両反りで、身幅は広く平造の所謂「蝦夷刀」であるが、それらとは明らかに異なる鑄造の日本刀も含まれている。日本刀が副葬されたアイヌ墓は、千歳市末広遺跡のIP45-Bと同じくIP-84の2基で、いずれも樽前a火山灰の下から検出されている（註3）。

一方、中近世アイヌ墓の中には、刀身そのものは見当たらないのに、鐔・目貫・小柄といった刀装具だけが残されているものが9例ほど確認できた（表1参照）。これらはおそらく木製の刀身に伴っていたと考えられ、刀身部が腐って失われた結果、刀装具だけが残されたのであろう。近代のアイヌ墓として今回取り上げた元紋別墓地・旧姉茶墓地・新浜遺跡では、前述の通り、太刀・腰刀は全く副葬されていなかった。しかしそのなかで、明治17年頃から昭和23年頃までモッペコタン居住者の墓地として利用された元紋別墓地では、73基中9基の墓から鐔が出土している。これらの墓では鉄の刀身や他の刀葬具類は全く発見されていないため、おそらくは伝世されたアイヌ民族資料によく見られるような、鐔のみが金属製で、飾金具を一切持たない鞘（それらは木製でしばしば精巧な彫刻が施されている）に木製の刀身を収めたエムシが副葬されていたものと推測される（註4）。

副葬品から、17世紀以前のアイヌの刀は、日本刀を含めて鉄製の刀身を有しているものが多かったが、18世紀頃にはほとんどが平造の所謂「蝦夷刀」や真鍮刀、あるいは木刀、刀身を持たず柄と鞘を木片で繋ぐものとなり、近代以降は「蝦夷刀」や真鍮刀さえも墓に副葬されないような状況となったと推測される。アイヌの刀は、利器としての十分な機能を有する「切れる刀」から、専ら宗教儀礼具に特化した「切れない刀」へと変容した可能性が高い。今回の分析から見て、1667年に降下した樽前b火山灰を銕んで、刀の副葬率が急速に低下していることは明らかで、それは寛文9年

(1669)の蝦夷蜂起（ジャクシャインの戦い）と時期的に符合する。後述するように、アイヌの葬制に関する聞き取り調査では、男性の墓に太刀を副葬するとの報告がなされていることからみて、刀の副葬率の低下は、単なる葬法上の変化、要するに刀を副葬しなくなったことに起因するとはおもわれない。むしろ刀は、刀身を失ったにせよ副葬され続けたと理解するべきであろう。むしろ問題は刀身の喪失にあり、それはジャクシャインの戦いを契機として、松前氏がアイヌから日本刀のような武器となりうる刀をとりあげ、さらには武器に転用可能な蝦夷刀やその原料となる鉄製品の移出制限を強化したためと考えることはできないだろうか。松前氏による「刀狩り」があった可能性については、古くは河野常吉氏が「松前氏の権力確定し蝦夷を支配するに及びては、利器をアイヌに所持せしむるの甚だ不得策なるを以て、刃金の入りたる刃物は一切之を渡すことを禁じたり」（河野1974）と説いている。近年では、アイヌの「ツグナイ」に用いられる宝物の筆頭に挙げられるものが刀剣類であり、寛政元年（1789）のアイヌによる和人襲撃事件、いわゆるクナシリ・メナシの戦いの際にも、アッケシのアイヌから松前藩兵に「ツグナイ」として「たんねつふ（太刀）一振」が差し出されたという岩崎奈緒子氏のアイヌの「宝」とその社会的機能に関する論考（岩崎1998）を引用し、佐々木利和氏も「刀狩り」の存在を支持する発言を行っている（佐々木前掲）。今回行った副葬品の分析からは、「刀狩り」の存在を強く支持する結果が得られたが、その時期は松前氏が徳川政権から一般和人とアイヌとの直接交易禁止権を付与され、唯一の無高大名として立藩が許された近世初頭ではなく、商場知行制下発生したアイヌと和人との最大の紛争、ジャクシャインの戦い後の17世紀後葉から18世紀前葉の可能性が高いことが明らかとなった。「刀狩り」は、「刀剣を主とする宝物のやりとりによって約束・謝罪・弁償するという、アイヌ社会におけるアシンベの慣行」（菊池1991）に基づく忠誠・服属儀礼として行われた可能性が高く、松前藩のアイヌ支配が、アイヌ社会に関する十分な知識の上に行われたことはいうまでもない。

【煙管】

煙管の副葬率は、17世紀後葉～19世紀後葉にか

けて4割前後の比較的高い比率を示す。これは、東北地方における同時期の煙管の副葬率（関根2000）にはほぼ匹敵する数値である。近代にはいり、煙管の副葬率が激減するのは、紙巻き煙草の普及により煙管の使用頻度が減ったためである。アイヌの喫煙具としては、金属製の煙管以外にも、本州にはみられない木製一本造の煙管（ニキセリ）や石製煙管（スマキセリ）が知られている（萱野前掲、宇田川1991、東京国立博物館1992）。宇田川洋氏によれば、石製の煙管は道東・道北から南サハリン、さらには北クリルやアムール川流域でも発見されているが、今回北海道のアイヌ墓の副葬品にはみられなかった。また、北海道をはじめ北方地域の民族資料に散見される木製の煙管は、土中で腐ってしまったためか、副葬品の中には確認できない。木製の煙管の存在を考慮すれば、煙管の副葬率からは、17世紀後葉以降のアイヌの喫煙率は、本州における和人のそれを上回っていたことになる。

アイヌの喫煙については、古くは馬場脩氏が樺太や千島から出土した煙管を紹介するとともに、基礎的研究を行った（馬場1942）。

1643年に蝦夷地・千島・樺太を探検したオランダ東インド会社のフリース船隊航海記録（北構1983）に登場するアイヌの多くは、喫煙の習俗を有している（註5）。実際、出土した金属製煙管の実年代を検討した森秀之氏が指摘するとおり、北海道内には17世紀前半に遡る確実な事例が存在する上（森1993）、フリース船隊航海記録によれば、17世紀中葉にはアイヌのあいだで喫煙がかなり普及していたことになる。さらに前に指摘したとおり、17世紀後葉以降、アイヌの喫煙率はおそらく本州における和人のそれを上回っていた可能性が高い。ところで、アイヌにとって喫煙に必要な煙草も金属製の煙管も基本的には移入品であった。煙管については、天明6年（1786）の「カラフト交易直段付帳」（松前町史編纂室1979）が示すとおり、一部大陸からもたらされたものが含まれてはいるが、基本的には煙草同様、本州からの交易品といえる。本州産の煙草は、白主会所におけるサンタン交易において、酒あるいは米や糶といった酒造りの原材料とともに重要な交易品となっている。アイヌの喫煙が極めて儀礼的色彩の強いものであることは広く知られているが、それが儀礼

であろうと単なる嗜好であろうと、喫煙には強い習慣性が伴う。アイヌの高い喫煙率は、アイヌに煙草の味を覚えさせ、喫煙具や煙草と引き替えに、毛皮や海産物を安く買ったこうとする和人の巧妙な戦略によって生み出されたのではなかろうか。

【鉄鍋】

鉄鍋は、汁や粥などを主体とする伝統的なアイヌの食生活には不可欠の道具であり、昔話（ウウエベケレ）のなかにも頻繁に登場する。

鉄鍋は、人骨から確認される限り、女性の墓にのみ副葬されており、その点は後述する民族誌とも一致する。被葬者の年齢は若年から老年まで幅広い。アイヌ墓への鉄鍋の副葬は15世紀にまで遡る可能性が高く、ほとんどの鉄鍋はきちんと伏せられた状態で発見されている（関根2003a）。北日本の鉄鍋は、越田賢一郎氏により詳細に検討されており（越田1984, 96, 98）、北海道から出土するものの大部分は本州からの移入品と考えられている。実際、文久2年（1862）の「与市御場所諸書上」（林家文書）には、余市のアイヌに売り渡す品々の中に、1升炊き（560文）から7升炊き（3貫文）まで、大小さまざまな鉄鍋が挙げられている（余市町史編纂室1985）。

②民族誌との比較

アイヌの葬制に関して触れた民族誌は多いが、副葬品の種類が男女別に書き上げられ、発掘調査データとの比較が可能な報告は少ない。管見に触れたものでは、1934年北海道帝国大学医学部解剖学教室による八雲町ウウラップアイヌに対する聞き取り調査（伊藤1936）や、1952年から54年に久保寺逸彦氏が行った沙流川流域のアイブの葬制に関する聞き取り調査（久保寺1956）、1970年から73年に北海道開拓記念館が樺太からの引き揚げ者を対象に聞き取りを行ったアイヌ民族の信仰に関

する研究（北海道開拓記念館1973）などが副葬品について比較的まとまっていた（表2）。調査時の話者の年齢などからみて、これらの報告にあるアイヌの葬制は、基本的に19世紀の終わりから20世紀前半の事柄を中心としていると思われる。これらの民族調査と前に述べた考古学的調査結果は、男女とも漆器・喫煙具を副葬品とする、あるいは鉄鍋の副葬は女性の墓に限られる等の点で一致する。一方、民族調査で男性の副葬品とされることの多い刀子や山刀、反対に女性の副葬品とされる首飾については、考古資料では特定の性と結びつきは認めがたいといった矛盾点も存在する。また、前に刀のところで触れたように、聞き取り調査では男性墓には太刀を副葬するとされるが、実際近代アイヌの墓からは金属製の刀身を持った刀剣類はほとんど出土せず、鐔のみ本物で刀身と鞘は木製の「太刀」もしくは鐔だけが少数の墓に副葬されているに過ぎない。

民族調査で男性墓に副葬するとされた弓や女性墓に副葬するとされた機織具については、考古資料ではほとんど確認できないが、それは弓や機織具などの木製品が土中で残りにくいためであろう。

5. むすび

アイヌの墓の副葬品は、マキリ・鉄鍋のように日常生活に不可欠のものと、刀・漆器・煙管のように儀礼になくはならないものから構成されており、それらはいわばアイヌの物質文化の中核をなすもののみなすことができる。材質上はマキリ・刀（刀装具）・煙管・鉄鍋といった金属器と漆器とに大別されるが、そのいずれもが基本的には交易により和人から入手されたものである（註6）。アイヌの物質文化は、まさにそれを特徴づけている主たる品々が和人との交易によって得られているという点に特色がある。

榎森進氏はシャクシャインの戦いを「アイヌに

表4 民族調査からみたアイヌの副葬品

アイヌ 民族調査	副葬品														民族調査の内容								
	武器		狩猟具		工具				漁労具		食器等		喫煙具			装身具							
調査場所	太刀	刀装具	矢筒	鎌・中柄	刀子	山刀	鎌	針	針入	砥石	鉤鉋	ヤス	釣針	漆器	鉄鍋	キセル	火打石	火打金	煙草入	耳飾	首飾	その他	
北海道(男)	●	●	●		●	●								●	○	○				●		弓	大正期(河野常吉1914)
北海道(女)														○	○	○					○	機織具	大正期(河野常吉1914)
八雲(男)	●		●	●	●						●	▲	▲	▲	●	●	●	●	●	●		弓 杖など	1934年調査(伊藤昌一1936)
八雲(女)							○	○	○					○	○	○	○	○	○	○		杖など	1934年調査(伊藤昌一1936)
沙流(男)	●		●	●	●								●	●	●	●	●	●	●	●		剃刀 弓矢 櫛など	1952-54年調査(久保寺逸彦1956)
沙流(女)					○		○	○						○	○	○	○	○	○	○		剃刀 鉄 機織具など	1952-54年調査(久保寺逸彦1956)
樺太(男)	●				●					●	●								●				1970-73年調査(開拓記念館1973)

対する政治・経済的支配」が強化される契機として位置づける（榎森1987）。本論で「刀狩り」と呼んだ「ツグナイ」を通しての刀の接収と、その素材たる鉄の移出制限は、事実上、松前藩がアイヌに対して行った「武装解除」であり「経済制裁」であったといえよう。しかし、そのような「刀狩り」を経た後も、アイヌは「切れない刀」を副葬するなどし、自らのアイデンティティに関わる葬制の維持に努めたと思われる。アイヌの墓は、副葬品の貧弱化などの変化はあるにせよ、伸展葬など葬制の基本的な要素を保持し続け、幕末にいたるまで決して和人墓の影響を受けることはなかったのである。

本論では煙管の副葬率の検討から、アイヌの喫煙儀礼は、アイヌを「煙草漬け」にした上で、煙草・煙管と交換に、海産物や毛皮を安く買ったところとする和人側の巧みな経済戦略によって生み出されたとの見方を示した。17世紀から18世紀にかけて生じたアイヌ墓における煙管の副葬率の上昇は、この時期、和人による経済的支配が強化されたことの証明に他ならない。

アイヌの歴史研究は、考古学と民族学、さらには和人側に残された史料に基づく文献史学、それらの共同作業が実現可能な、別の見方をすれば、それによってしかなし得ない研究分野といえる。

考古学によりアイヌ文化を研究することの意義について、民族調査で判明するのは主として近代のアイヌ文化であり、近世以前の事は考古学に拠らざるを得ないからとの説明がしばしばなされてきた（岡田2000ほか）。しかし今回の分析から、近代のアイヌの葬制に関してさえ、聞き取り調査だけでは必ずしもその本当の姿に迫れない可能性が明らかとなった。その原因は、話者は本来あるべき姿としての「理想」を語る傾向にあり、その結果、時間軸が無視され、どの時代にも当てはまらない「物語」が生み出されるためと考えられる。聞き取り調査と考古学的調査の矛盾点の背景には、アイヌ民族の歩んだ複雑な歴史があるように思われる。

謝辞

調査・執筆に際して、恵庭市教育委員会、余市町教育委員会ならびに、乾芳宏、竹下由紀子、豊原熙司、平川善祥、藤沼邦彦の諸氏にお世話になっ

た。末筆ではありますが感謝申し上げます。

註

- (1) 千歳市末広遺跡では、樽前 a 火山灰の下で多数の伸展葬墓に混じって3基の屈葬墓が発見されている（IP62・90・123）。また、岩内町東山遺跡でも伸展葬墓2基とともに木棺を伴う屈葬墓が1基発見されている。今回これらの屈葬墓はアイヌ墓から除外した。
- (2) 沙流川流域や余市周辺の墓で鉄鍋の副葬率が低いのは、鉄鍋を副葬する女性の墓が少ないことが原因ではない（表1参照）。女性墓は比較的多く調査されているにもかかわらず、他の地域に比べ鉄鍋が少ないのは、地域性と理解されよう。
- (3) 末広遺跡では、屈葬のため今回和人墓としたIP-123からも日本刀が1振出土している。
- (4) 刀を宗教儀礼に用いていたアイヌは、「その刀剣に付随した鏝一枚でさえこれを病者の枕元に置けば病魔を退け、又その苦痛を訴える処をこの鏝でなれば、その苦痛は立ちどころに去ると云はれた位貴ばれた為に、この鏝を護身用に婦人の玉飾のシトキと云う中心飾にこれを配し、又死者あるときはその冥福を祈る為にこの鏝を胸につけて送り、この実物の無きものは木型に写してまで死出の旅路につけてやる」（金田一・杉山1943）場合もあったようである。
- (5) 十勝、厚岸、バルバーレン島（歯舞諸島勇留島？）、国後島北東海岸、樺太アニウ湾・北知床半島など。
- (6) 近年、沙流川流域のイルエカシ遺跡やビバウシ遺跡で検出された鍛冶関連遺構や、口縁部を意図的に切断した鉄鍋のような鉄の二次原料の存在から、アイヌが和人より交易で入手した鉄素材をもとに鋼を製造する技術を有していたことが明らかになっている（深澤1998）。アイヌの有した鉄加工技術は、製鉄・精錬・鍛造・鍛冶といった鉄加工技術システムのうち、精錬と鍛冶という分野に限られ、基本的には和人との交易なしには成立し得ない性格のものであった。

〈引用・参考文献〉

- 青野友哉編 1999『ポンマ』 伊達市教育委員会
 安西雅希・岡崎次郎・乾芳宏 2001『余市町大川遺跡』
 余市町教育委員会
 石川 朗 1994『釧路市幣舞遺跡調査報告書』Ⅱ 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
 石附喜三男 1977『ウサクマイ遺跡-N地点発掘調査報告書-I』 千歳市教育委員会

- 石橋次雄ほか 1975『十勝太若月ー第三次発掘調査ー』
浦幌町教育委員会
- 出穂雅実 1999「K501遺跡」『札幌市文化財調査報告書
第61集』(第2分冊)
- 出穂雅実 1999「K503遺跡」『札幌市文化財調査報告書
第61集』(第4分冊)
- 出穂雅実・羽賀憲二 1999「K499遺跡」『札幌市文化財
調査報告書第61集』(第1分冊)
- 伊藤昌一 1936「八雲アイヌの埋葬法」『北海道帝国大
学医学部解剖学教室研究報告』1 113～123頁
- 稲生典太郎 1997『北方文化の考古土俗学』 岩田書店
- 乾 芳宏 2000 a『大川遺跡における考古学的調査』II
余市町教育委員会
- 乾 芳宏 2000 b『大川遺跡における考古学的調査』III
余市町教育委員会
- 乾 芳宏 2000 c『大川遺跡における考古学的調査』IV
余市町教育委員会
- 乾 芳宏 2002「海の民としてのアイヌ社会の漆器考古
学」『考古学ジャーナル』489 16～19頁
- 岩崎奈緒子 1998『日本近世のアイヌ社会』 校倉書房
- 宇田川洋 1991「北方地域の煙管と喫煙儀礼」『東京大
学考古学研究室研究紀要』10 51～97頁
- 宇田川洋 2001『アイヌ考古学研究・序論』 北海道出
版企画センター
- 内山真澄 1985『寿都町文化財調査報告』III
- 内山真澄ほか 1999『香深井5遺跡発掘調査報告書(2)』
礼文町教育委員会
- 内山真澄 2000『稚内市泊岸1遺跡』 稚内市教育委員
会
- 榎森 進 1987『アイヌの歴史』 三省堂
- 大谷敏三・田村俊之 1981『末広遺跡における考古学的
調査(上)』 千歳市文化財調査報告書VI 千歳市教
育委員会
- 大谷敏三・田村俊之 1982『末広遺跡における考古学的
調査(下)』 千歳市文化財調査報告書VII 千歳市教
育委員会
- 大谷敏三・田村俊之 1985『末広遺跡における考古学的
調査(続)』 千歳市文化財調査報告書XI 千歳市教
育委員会
- 大谷敏三・田村俊之 1986『梅川3遺跡における考古学
的調査』 千歳市文化財調査報告書XII 千歳市教育委
員会
- 大場利夫・桐井力蔵 1958『岩内遺跡』 北海道岩内郡
岩内町教育委員会
- 大場利夫 1963『苫小牧市クプロコ遺跡発掘調査報告書
(第1次)』 苫小牧市教育委員会
- 大場利夫・瀬瀬善一・金子有明 1963『寿都遺跡』 北
海道寿都町教育委員会
- 大場利夫・溝口稔 1971『室蘭絵鞆遺跡発掘調査概要報
告書』 室蘭市教育委員会
- 大場利夫・大井晴男 1973『オホーツク文化の研究1
オンコロマナイ貝塚』 東京大学出版会
- 小笠原忠久ほか 1978『白尻B遺跡発掘調査概報』 南
茅部町教育委員会
- 岡田淳子 2000「近世アイヌ墓の検証」『大塚初重先生
頌寿記念論集』 925～942頁
- 岡田淳子・宮宏明 1999『入舟遺跡における考古学的調
査』 余市町教育委員会
- 加藤邦雄 1991「瀬瀬町発見の火葬墓について」『北海
道考古学』第17輯 91～113頁 北海道考古学会
- 上屋真一 1988『中島松6・7遺跡』 恵庭市教育委員
会
- 上屋真一・佐藤幾子 1992『ユカンボシE3遺跡B地点』
恵庭市教育委員会
- 上屋真一ほか 1998『カリンバ2遺跡第III・VI・V地点』
恵庭市教育委員会
- 上屋真一ほか 2000『カリンバ2遺跡第VI地点』 恵庭
市教育委員会
- 萱野 茂 1978『アイヌの民具』 すずさわ書店
- 川内 基ほか 1990『額平川2遺跡』 平取町教育委員
会
- 川上 淳 1994『根室市コタンケン遺跡発掘調査報告書』
根室市教育委員会
- 菊池勇夫 1991『北方史のなかの近世日本』 校倉書房
- 北構保男 1983『一六四三年アイヌ社会探訪記』 雄山
閣出版
- 北構保男訳 1985『アイヌ人とその文化』 世界の民族
誌1 六興出版
- 北構保男編 2001『アイヌ民族・オホーツク文化関連研
究論文翻訳集』 北地文化研究会
- 北野信彦 2002 a「出土漆器からみた北海道蝦夷地にお
ける近世アイヌ社会の一性格」『研究紀要』35-2 1
～24頁 くらしき作陽大学
- 北野信彦 2002 b「アイヌ社会の漆器考古学が意味する
もの」『考古学ジャーナル』489 4～6頁
- 木村哲朗ほか 1996『堀株神社遺跡発掘調査報告書』
泊町教育委員会
- 金田一京助・杉山寿栄男 1943『アイヌ芸術』第三卷

アイヌ墓の副葬品（関根）

- （金工・漆器篇） 第一青年社
- 久保寺逸彦 1976「北海道アイヌの葬制」『民族学研究』
19-3・4 1～20・3・4
- 熊谷仁志・藤井浩 1998『美沢川流域の遺跡群XIX 美々
4遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター調査報告書
第113集
- 黒崎康雄 1980『旧姉茶墓地調査報告』浦河町教育委
員会
- 河野常吉 1914「アイヌの副葬品」『人類学雑誌』第
29巻第2号 45～47頁
- 河野常吉 1974『河野常吉著作集』I 北海道出版企画
センター
- 河野広道・佐藤忠雄 1963『日進—北海道名寄市日進遺
跡発掘報告—』名寄市教育委員会
- 河野本道・小柳リラコ 1992『掘株1・2遺跡』北海
道文化財研究所調査報告書6
- 児玉作左衛門ほか 1936『北海道帝国大学医学部解剖学
教室研究報告』第一輯
- 児玉作左衛門・大場利夫 1956「根室国温根沼遺跡の発
掘について」『北方文化研究報告』第11輯 75～145頁
北海道大学
- 古原敏弘 1996「エムシについて」『北海道立アイヌ民
族文化研究センター研究紀要』2 149～157頁
- 古原敏弘 2002「アイヌ社会の漆器」『考古学ジャーナ
ル』489 25～27頁
- 西連寺健ほか 1979『ウサクマイ遺跡群とその周辺にお
ける考古学的調査』千歳市文化財調査報告書IV
- 佐々木利和 1995『アイヌの工芸』至文堂
- 佐々木利和 2001『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館
歴史文化ライブラリー128
- 佐藤和雄ほか 1995『ベンケナイ川流域の遺跡群III』
北海道埋蔵文化財センター調査報告書第95集
- 佐藤忠雄 1964『稚内・宗谷の遺跡』
- 関根達人 1999「東北地方における近世食膳具の構成」
『東北文化研究室紀要』40 33～56頁
- 関根達人 2000「江戸時代の喫煙に関する考古学的検討」
『文化』64-1・2 69～88頁 東北大学文学会
- 関根達人 2002「近世大名墓における本葬と分霊」『歴
史』99 1～29頁 東北史学会
- 関根達人 2003a「鍋被り葬考」『人文社会論叢』（人文
科学篇）9 弘前大学 23～47頁
- 関根達人 2003b「アイヌ墓の副葬品に関する考古学的
検討」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』
124～127頁
- 園部真幸ほか 1981『元江別遺跡群』江別市文化財調
査報告書XIII
- 田口 尚 2002「中・近世アイヌ社会における漆器考古
学の動向」『考古学ジャーナル』489 12～15頁
- 竹田輝雄・千代肇・福田茂夫 1993『伊達市有珠オヤコ
ツ遺跡・ボンマ遺跡』
- 多田犬一 1967「苫小牧Ⅱ号（植村）遺跡発掘調査報告」
『郷土の研究』2 苫小牧郷土文化研究会
- 田中哲郎ほか 1986『ユオイチャン跡・ポロモイチャン
跡・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報
告書第26集
- 種市幸生ほか 2001『千歳市ウサクマイN遺跡』北海
道埋蔵文化財センター調査報告書第156集
- 田部淳・田村リラコ 1985『南川2遺跡』北海道瀬棚
町教育委員会
- 田村俊之 1983「北海道における近世の墓制」『北海道
考古学』19 51～58頁
- 田村俊之・小野哲也 2002「陸の民としてのアイヌ社会
の漆器考古学」『考古学ジャーナル』489 20～24頁
- 千葉英一ほか 1984『美沢川流域の遺跡群XVII』北海
道埋蔵文化財センター調査報告書第89集
- 千葉英一ほか 1984『千歳市オサットー1遺跡・キウス
7遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第90
集
- 東京国立博物館 1992『東京国立博物館図版目録・アイ
ヌ民族資料篇』
- 富永慶一・三橋公平ほか 1965『北海道阿寒町の文化財』
先史文化篇第二輯 阿寒町教育委員会
- 豊原熙司・浦坂周一 1981『植別川遺跡』恵庭市教育
委員会
- 豊原熙司 1997「近世アイヌ墓址にみられる有溝墓につ
いて」『紋別市郷土博物館報告』第10号 21～32頁
- 豊原熙司 1998「近世アイヌ墓址のいくつかの問題」
『北方の考古学』419～434頁
- 中田幹雄・石附喜三男 1974『ウサクマイ遺跡—B地点
発掘調査報告書—』千歳市教育委員会
- 西田茂・三浦正人・鈴木信ほか 1999『ユカンボンC15
遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第
146集
- 野村崇ほか 1974『札刈遺跡』木古内町教育委員会
- 馬場 脩 1942「日本北端地域のアイヌと煙草」『古代
文化』13-11
- 平川善祥 1984「近世アイヌ墳墓の考古学的研究」『北
海道の研究』2 考古篇II 375～418頁

- 平取町教育委員会 1988『平取町イルカエシ遺跡発掘調査概報』
- 広瀬経一 1963『北海道の文化』特集号 北海道文化財保護協会
- 深澤百合子 1998「17世紀沙流川流域アイヌ文化の銅製造技術」『北海道考古学』第34輯 43～61頁
- 藤田潮ほか 1971『浜別海遺跡』 北地文化研究会
- 藤田登編 1985『御幸町』 森町教育委員会
- 古屋敷則雄 1995『蛭子川1遺跡』 戸井町教育委員会
- 北海道開拓記念館 1973『民族調査報告書資料編Ⅰ』
北海道開拓記念館調査報告2
- 北海道開拓記念館 1998『うるし文化－漆器が語る北海道の歴史－』 第47回特別展図録
- 松崎水穂ほか 1998「久木屋敷遺跡」『原歌遺跡S地点』
111～119頁 上ノ国町教育委員会
- 松崎水穂・松田輝弥 2001『史跡上之國勝山館跡』X X
II 上ノ国町教育委員会
- 松下巨・三橋公平ほか 1975『柳沢第19地点－北海道紋別市柳沢第19地点調査報告－』 紋別市教育委員会
- 松谷純一 1989『中島松5遺跡A地点』 恵庭市教育委員会
- 松田 功 1993『オンネベツ川西岸台地遺跡』 斜里町文化財調査報告VI
- 松田 功 1995『オシヤマッ川遺跡』 斜里町文化財調査報告VII
- 松前町史編纂室 1985『松前町史』資料編第三卷
- 三浦正人・鎌田望・鈴木信 1995『オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第96集
- 皆川洋一ほか 1997『千歳市キウス5遺跡(3)』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第115集
- 峰山 巖 1965「有珠善光寺の墓」『北海道の文化』8
- 峰山巖編 1980『瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』
瀬棚町教育委員会
- 宮下 登 1971「有珠B遺跡米屋地区発掘調査」『北海道の文化』14
- 森 秀之 1993「北海道の遺跡から出土した金属製煙管の実年代」『北海道考古学』29 57～68頁
- 森岡健治・長田佳宏 1997『平取町オバウシナイ1遺跡』
北海道平取町教育委員会
- 森岡健治・長田佳宏 1999『平取町平取桜井遺跡』 北海道平取町教育委員会
- 藪中剛司 1994「ニンカリ（耳飾り）について」『アイヌ民族博物館研究報告』第4号 87～95頁
- 山本文男 1984『ノトロ岬』 音別町教育委員会
- 余市町史編纂室 1985『余市町史』第1巻資料編1
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』
- 渡辺俊一・宮夫靖夫 1982『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書』VII 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター